

木育サミット in 福岡あさくら 開催レポート

2024年11月30日[土]
ピーポート甘木[福岡県朝倉市]



第1部

ウッドスタート宣言調印式・ ウッドスタートトークセッション

森林は利用することで若返る
地域の木を生かした子育て・子育てを
福岡県朝倉市、グリーンコープ共同体と
ウッドスタート宣言調印式

地元の木を子育てや子育て、高齢者福祉に生かす。木を消費することで日本の森を育てながら守る。そうした木から始まる循環型社会の構築を目指す「ウッドスタート宣言」の調印式が2024年11月30日、福岡県朝倉市、一般社団法人グリーンコープ共同体、東京おもちゃ美術館の3者により行われました。朝倉市のピーポート甘木で開催された調印式には、東京おもちゃ美術館の多田千尋館長のほか、林裕二・朝倉市長、日高容子・グリーンコープ共同体代表理事、来賓として青山豊久・林野庁長官が出席。「暮らしの中に木を取り入れ、木の持つ可能性を最大限に引き出し、子育て・子育てに生かすよう協力していく」というウッドスタート宣言に3者が署名すると、会場から大きな拍手が起こりました。

多田館長は、「ウッドスタート宣言は、朝倉市の参加で全国63の地方自治体に広がった。西日本を中心に43万人の組合員がいるグリーンコープも2025年から木のおもちゃを誕生祝い品として組合員に贈呈することになった。大変めでたいことであ



一般社団法人グリーンコープ共同体 代表理事 日高 容子

り、これを契機に森林大国日本にふさわしい循環型社会をさらにみなさんと目指していきたい」とあいさつ。続いて行われたトークセッションでは、青山長官が森林の現状について「戦後植樹を進めてきた森林は、今まさに利用するとき、『守る』という発想だけでは森林の高齢化が進み、二酸化炭素の吸収量も落ちる一方なので、今後は木を使い、植えて、育てるという森林を若返らせる取り組みが重要」と報告。その上で、「ウッドスタート宣言は、木を使う循環型社会のまさに入口。大変ありがたい活動だと感じている」とエールを送りました。朝倉市は2017年7月に起きた九州北部豪雨で、甚大な被害



朝倉市長 林 裕二



林野庁長官 青山 豊久

を受けた地域。林市長は「全国から多くの応援をいただき、現在ようやくほぼ復旧に近づいた」と現状を伝え、「グリーンコープのみなさんには、夢を失い、心がすさんだ被災者に対して災害直後から、食事や身の回りのことなど本当に親身に支援いただいた。本当に感謝している」と振り返りました。

青山長官は国の災害対策を説明した後、「長期的には気候変動の原因である二酸化炭素を減らしていく必要があり、そのためにも、木の植樹、森林の若返りが大切」とあらためて強調しました。

日高代表理事は、「九州北部豪雨には、組合員からのカンパを含め、スピード感を持って支援活動を行った」と振り返り、今後のビジョンについては、「グリーンコープは二酸化炭素削減のため配達トラック1000台のEV化などを進めているが、これからは『木育』という視点も取り入れて、より良い環境や心をはぐくむ活動を深めていきたい。組合員から年間6,000人の赤ちゃんが生まれる予測なので、全員に木のおもちゃを贈ることで木がある暮らしを提案していきたい」と語りました。

東京おもちゃ美術館を16年間見てきた多田館長は、「赤ちゃんのときに木のおもちゃに触れて育った子どもは、小学校に入学して木の机を選ぶ。その延長に『家を建てるなら木の家がいい』という選択も生まれるだろうと、肌感覚で実感している」と話しました。

トークセッションの最後には、多田館長から、2022年にオープンした福岡おもちゃ美術館と朝倉市に関わる“秘話”も紹介されました。「開館2年前にスタッフたちが木を見るために朝倉の山に入った。そのとき出会った『100年ヒノキ』を使って、1,500㎡もある館内の大部分のフローリングができた。ひいおじいちゃんが植えたというヒノキを、そのひ孫の林業家が切ってくれた。そうした深いご縁をいただいた朝倉市とおもちゃ美術館は親戚だと思っている」。

木は生き物。人が植えて、人が育て、人が活用することで、思いやぬくもりも脈々と受け継がれるのかもしれない。



基調シンポジウム

市民協働と木育 ～山や森を身近に感じるために～



基調シンポジウムでは、地域で活動する側、森林や地域づくりをサポートする側を代表した4人のシンポジストが、多田館長のコーディネートのもと意見交換をしました。登壇者は、青山豊久・林野庁長官、金原望・株式会社未来工房代表取締役、坂本寛子・グリーンコープ生協ふくおか理事長、林崎理・一般財団法人地域活性化センター理事長。

シンポジウムは、日本の現状への問いかけからスタートしました。「日本は、世界第3位の森林大国。ただ、私たちはそれに

ふさわしいライフスタイルになっているだろうか。実は豊かな森をないがしろにしていないだろうか。なぜ目の前に森があるのに、木材の6、7割を遠い海外から輸入しているのだろうか」。こうした疑問を共有した上で、「森とまちをどうつないでいくのか」というテーマに関わる「木育」について、多田館長は「木育かきくけこ」という東京おもちゃ美術館の提唱する考え方を紹介しました。

「木育は、心を育てるだけでなく、『かきくけこ』全部のメッセージを含むのだという認識が大事。1980年にノルウェーが木育を小学校の義務教育に取り入れて以降、北欧の林業が

木育かきくけこ

- か = 環境を守る意識を育てる
- き = 木の文化を伝える
- く = 暮らしに木を取り入れる
- け = 経済を活性化させる
- こ = 子どもの豊かな心を育てる



ものすごく発展したように、最終的には経済を伸ばすことも大切だと捉えている」と述べました。

各シンポジストからのスピーチでは、まず坂本理事長がグリーンコープの理念や活動について詳しく紹介。「みどりの地球をみどりのままで、子どもたちに手渡すために」という思いから、安心安全な食品の流通、生産者支援、配達トラックのEV化、容器のリユースやリサイクル、脱原発運動などに取り組んでいるほか、運営する託児や幼児施設に木のおもちゃを取り入れるなど、木育も導入している状況を伝えました。

グリーンコープはカタログで漆器やまな板、せいろなど木でできた生活用品も取り扱っており、坂本理事長は、「私自身、以前は『木の製品は高い』と手を出せなかったけど、生産者の思いや歴史を知ること興味湧いた。使ってみるととても生活に馴染んで良かった。私たちの木育は、身構えて取り組むのではなく、いつもの暮らしの中に木の製品がある心地よさ、魅力を感じてもらうことから始めたい。そこから『木のものを選びたい』という人が増えるのではと思う」と話しました。これに対し、多田館長は「グリーンコープの木育は、『イベント』というより日常の中に溶け込ませることが強み」と感想を伝え、青山長官は「ぜひ、その活動から木造住宅への関心や店舗の木質化などにもつなげてほしい」とアドバイス。林崎理事長は「高価に感じる木の製品も、そこにあるストーリーを聞くことで価値を強く感じる人が増え

るのだと納得しました」と述べました。

続いて、国産材のみを使った家づくりにこだわる工務店「未来工房」(本社・福岡県久留米市)の金原代表が活動報告。熊本の球磨杉、八女杉といった九州の木材のみを使い、合板は一切使わない木の家を建てると、その空間では子どもたちがのびのびと寝転んだり、冬でも裸足だったり、大人も趣味が増えたり、「私たちも驚くほど、木の力を感じている」と話しました。



グリーンコープ生協ふくおか 理事長 坂本 寛子



株式会社未来工房 代表取締役 金原 望 (写真中央)

一方、そうした家づくりをしている中、木材の生産地が毎年のように豪雨被害を受けるようになったことや、崩壊寸前の林業や大工の現状を知ったことから、「山と消費者の間にいる工務店だからこそ、林業の現状を消費者に伝えることができる」として、約10年前から独自に考案した木育をスタート。知識だけではなく体感を通して学べるよう、上棟体験、丸太をノコギリで切る体験、かんなくずを敷き詰めたプール、冊子やオンライン教材などを作成。そうして種まきを続けてきた結果、子どものころにその木育を体験した若者2人が、「家づくりに携わりたい」と未来工房に新入社員として入社したエピソードも紹介されました。現在では、「どこでも森林の問題は起きている」として、全国の工務店など30、40社と連携して「森のとびら」という木育活動を展開。作成した教材を共有したり、新しい取り組みを報告し合ったりしていると伝えました。

この報告に対して、青山長官は「企業の社会的責任と捉えられる以上のことをしてくださっているなと感じました。林野庁としても表彰したいくらい」と笑顔で感想を述べました。林崎理事長は、「10年前に木育に触れた若者2人が家づくりを志して入社されたストーリーには感動した。長い先を見据えて今の取り組みを行うことが大切だと実感した」と感想を伝えました。

また、青山長官は、日本の森林の現状を踏まえて「なぜ木育が必要なのか」を解説。「そもそも、木を切ることに抵抗を感じる世代がいるのはなぜか」という点について、学習指導要領との関連から分析しました。「昭和55年に改訂された学習指導要領では、それまで教えていた林業が消え、農業と水産業だけになった。つまり、森林関係のことを小学5年生のときに何も習っ

ていない。平成4年に林業の教育は復活したが、『森林は国土保全や水源涵養のために大切』とされたので、1981年生まれ以降の人は『森は守るもの』という教育を受けている」と話しました。一方、日本の森林は木材価格の低迷などが原因で、木の切り出しが激減。森林の木は高齢化が進み、成長期であればたくさん吸収する二酸化炭素も吸収量が落ちていと説明しました。「今、日本の森林の二酸化炭素吸収量はおよそ年間5,000万トンとされていますが、この先どんどん減少していく。木は切らずに守った方がいいと思っている人も多いと思うが、地球温暖化対策のためにも、木を切り出して新しく植える“森林の若返り”が急務。そのためにも、国産材の利活用が大切。木育は『使う』ための大きなきっかけにもなるので、林野庁としても推進したい」と力を込めて語りました。



林野庁長官 青山 豊久



一般財団法人地域活性化センター 理事長 林崎 理

林崎理事長はシンポジウムを振り返り、「私たち日本人は数千年に渡って木の文化の中で歴史を紡いできている。だから木の住宅、木のおもちゃが落ち着くし、心地よいのだろう。そうした木育が、実は地球温暖化や持続可能性というテーマとつながっていて、そのつながりには林業が欠かせないということが、この木育サミットで明確に伝わったのではないかと思う」とコメント。続けて、「大切なのは、林業で森林のサイクルをしっかりと回していくこと。そして、切った木を製品にして流通させていく経済。さらに、そのバックボーンとして、木に対する価値をしっかりと育む木育活動。そのつながりこそが重要なのだとあらためて感じました」と感想を述べました。

今後のビジョンについて、坂本理事長は「グリーンコープで植樹する機会があるのですが、今まで木の製品を使うだけだった私

たちが、木を植えて循環させていく部分に関わっていけることはとてもありがたいこと。今回植えた木が何十年か後に木の製品になって、グリーンコープの商品に使えるようになると想像すると、とてもうれしく感じる。そういう未来を目指して、ウッドスタート宣言やこのシンポジウムでの学びを生かしていきたい」と語りました。

金原代表も、「日本の森林荒廃は、外国材を当然のように使ってきた住宅業界の責任も大きい」としたうえで、「今後は木育を通じて、国産材を使った家づくりが当たり前になる未来をつくりたい」と意気込みを語りました。

青山長官からは「森林環境税は、納税者の方から年間1,000円いただいている。基本的には森林整備に使うが、実は木育活動にも使っている。ぜひ、お住まいの市町村に『何に使っているのか』と聞いてみて」というアドバイスも。

最後に林崎理事長は、「今日のシンポジウムで、未来に向けた取り組みの大切さを深く感じた。子どもへの教育、森の手入れ。いずれも未来に向けた行動という共通項がある。そして、『連携』というキーワードも心に残った。現代は、社会が分断される方向に向かっている感覚もあるが、分断されると誰も力を発揮できなくなる。さまざまな主体が連携して、未来に向けた取り組みを続けていくことの重要性を感じた」と思いを語りました。それを受けて多田館長は、「都市と森をつなげる。これは、孤軍奮闘で木育をやってもうまくいかない。シンポジストの事例のように、いろいろな人との連携こそが未来をひらくカギになると感じた」と締めくくりました。

(文：渡邊レイラ、写真：渡邊精二)



基調講演 I

子どもの発達と木育の可能性

鹿児島大学教育学部 技術科木材加工研究室
教授 寺床 勝也

昔は、「子どもは環境から刺激を与えられて知識を吸収する」と考えられてきたが、新しい子ども観では、「自ら環境を探索し、体験の中から意味と内容を構築する」と捉えられている、ということが語られました。環境と子どもの関係性に着目し、人間は環境を手がかりに行動しているので、保育者（教育者）は、環境による子どもの行動を予測して、意図的に環境を構成することが求められる、とされ、木育活動をするときにも、自発的な活動である遊びを中心にするためには、意図的に5点【①五感と身体を使う、②集中し状況に応じて思考する、③人と関わり自己を確立する、④失敗し立ち直りを経験する、⑤想像し表現する】に留意して環境構成をする重要性が示されました。そのうえで、遊びに集中し、のめり込んでいるような状態の子どもは、最も創造性が高まり、自己肯定感・満足度が高まっているので、大人はそっと見守ることが大事。「子どもは、環境から遊びを発掘する天才である!」というのは、木育にも通じる言葉です。子どもの創造力と集中力が高まる遊びを大人はそっと見守ってほしいし、木のおもちゃを開発する人にはそんな視点も大切にしてほしい、と伝えられました。

基調講演 II

福岡おもちゃ美術館

赤ちゃん木育ひろばから見た“木育”のこれから

認定NPO法人芸術と遊び創造協会
おもちゃ美術館エグゼクティブ・ディレクター
福岡おもちゃ美術館 初代館長 石井 今日子

現在、全国に12館あるおもちゃ美術館は、どの館も地産地消の木のおもちゃで遊ぶことができ、それぞれの独自性を持ち、地域色が非常に豊かです。共通点は、どの館も木育を推進していることと、おもちゃ学芸員が活動していること。おもちゃというのは、「動かして初めて面白さが伝わるもの」であり、「だれかと一緒に遊ぶことで初めて楽しさが伝わるもの」と考えているので、おもちゃ学芸員というコーディネーターが館内で活動しています。

福岡おもちゃ美術館では、朝倉市の木材—100年ヒノキや杉—が多く使われており、福岡の木材で、福岡の職人がつくった空間・おもちゃで存分に遊んでほしい、と多くの県内の方々の協力を得てできあがりました。

若いパパ・ママから「子どもとどうやって遊んだらいいかわからない」という質問が多かったと感じていた石井さんは、「ここで遊んでいると、我が子の成長を感じる」そんな手ごたえを感じてほしい、と「赤ちゃん木育ひろば」を作ったときの想いを語りました。おもちゃ美術館にあるおもちゃには、キャラクターはついていません。だからこそ、子どもたちは何に見立ててもいいので自由に遊べる、“寛容性”を指摘しました。木のおもちゃで未来の子どもたちに本当に必要な力を身に付けてもらえるような遊びを展開してほしいと、今後の木育への願いが伝えられました。



鹿児島大学 教育学部 教授 寺床 勝也



芸術と遊び創造協会 石井 今日子

▶ 分科会 01

シンポジウム「地域活性化と木育」

全体要旨

シンポジウムIIでは、㈱Tree To Green代表の青野 裕介氏をコーディネーターに、小国町産業課長の穴井氏、オークヴィレッジ㈱の佐々木氏、九州大学大学院の尾方教授の発表を軸に、地域と木育に関する議論が交わされました。穴井氏は江戸時代から続く小国町の林業の要である小国杉を中心としたまちづくりやそこに連なる木育の取組みについて、佐々木氏はオークヴィレッジ㈱の理念に基づく木育の活動や、群馬県みなかみ町での取組みに代表される森林の環境改善につなげる持続的な手法を用いた6次産業化の取組みなどについて、尾方教授は、豪雨災害が契機となった起き上がりこぼしのデザインプロジェクトが地域とつながっていく様子についてそれぞれ発表しました。

全体を通じて、産官学それぞれの事例から、地域の森林を木材資源として有効活用し、産業と環境の調和を図る持続可能な取組みの重要性が浮き彫りとなりました。特に、担い手不足や国産材離れが進む現状を踏まえ、次世代へ環境と文化を繋いでいく「木育」の取組みがいかに重要であるかが改めて強調されました。



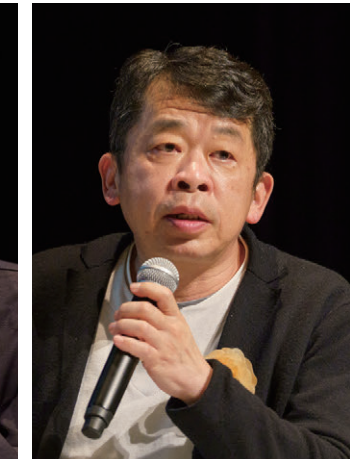
株式会社Tree to Green 代表取締役
青野 裕介



熊本県小国町 産業課長
穴井 徹



オークヴィレッジ株式会社 取締役
佐々木 一弘



九州大学大学院 教授
尾方 義人

● 熊本県小国町 産業課長 穴井 徹 氏

「ALL FOR THE NEXT～すべては次世代のために～」

小国町は、江戸時代から続く林業地で、先人から受け継いだ小国杉を守り育ててきました。そのまちづくりの施策の中心には常に小国杉があります。木育の取組としては、2013年にウッドスタートを宣言して以来、ウッドスタートセミナー、木育キャラバンの開催、木育拠点施設「カンガルーのぼっけ」の整備、誕生祝いの品として木のおもちゃを、二十歳の集いの記念品として木のハンガーを配布するなど、木材への親しみを創る活動をしてきています。地域での木育レンジャーの活動や、若手職人の増加など、木育は着実に根付いてきており、民間との協創や、商業施設と小国杉のコラボなど、広がりも見せています。

● オークヴィレッジ株式会社 取締役 佐々木 一弘 氏

「飛騨高山の木工集団 オークヴィレッジが実践する持続可能な森林と人をつなぐモノづくり」

飛騨高山に本社を構えるオークヴィレッジ株式会社は、「100年かけて育った木は100年使えるものに」を理念に掲げる木工集団です。「木育」にも力を入れ、森林と人をつなぐ活動をしています。群馬県みなかみ町では自伐型林業を活用し、間伐された広葉樹の有効利用を後押ししています。行政の手が入りにくい放置された里山地域でその地域のリソースを使って森林が良くなっていくような手法での6次産業化を推進し、地域資源を活用した持続可能な社会の実現を目指しています。2027年には「みなかみ町おもちゃ美術館」（仮称）の開館を目指しており、森林と人をつなぐ「木育」の活動もさらに発展させていきます。

● 九州大学大学院 芸術工学研究院 教授 尾方 義人 氏

「あさくら みらい こども」

朝倉杉を活用した起き上がりこぼしのプロジェクトは、豪雨災害を契機に始まりました。被災地の状況を目の当たりにし、学生た

ちと何ができるかを考える中で、流木を使ったデザインに行きつきました。起き上がりこぼしは通常、おもりを入れることで簡単に製作可能ですが、杉のワンパーツで仕上げることを目指し、形状や揺れ方に徹底的にこだわり試行錯誤を重ねました。その結果、シンプルでありながら工夫を凝らした製品が完成。市とも連携し、朝倉の子どもたちにファーストイとして起き上がりこぼしを贈るプロジェクトが実現しました。

記録：地域活性化センター 小口 裕史（愛知県長久手市）

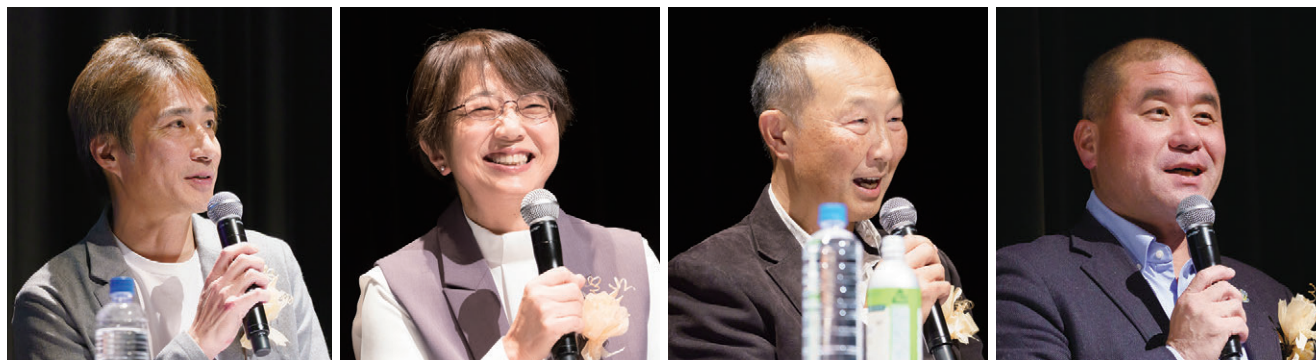
▶ 分科会 02

シンポジウム「親子に伝える木育」

全体要旨

シンポジウムIIIでは、「親子に伝える木育」をテーマに全国のおもちゃ美術館の実践事例が共有されました。星野太郎氏の進行のもと、4名のシンポジストが登壇し、それぞれの取組を紹介。平野氏は花巻おもちゃ美術館の商業的アプローチと地域連携について、岡崎氏は元保育士の視点から佐川おもちゃ美術館での木育実践について、田口氏は外遊びの専門家として野外教育と木育の融合について、矢野氏はFC今治の新しい挑戦としてのおもちゃ美術館設立について発表を行いました。

全国12館のおもちゃ美術館は、それぞれに異なった特徴がありながら森と都市を繋ぐ装置として機能しており、木育を通じて子どもたちの未来づくりに貢献していることが示されました。登壇者はそれぞれ、木育に対する熱意をもって事業や活動に取り組み、地域や世代を超えた繋がりを築いています。最終的には人が重要であり、同じ思いを持った方とタッグを組んで進めていくことが重要であると語られ、また、参加者も「木育の仲間」として共に明るい未来を作り上げることが呼びかけられました。

株式会社小友木材店 営業部長
平野 裕幸佐川おもちゃ美術館 館長
岡崎 明子株式会社ON-WIPPS 代表取締役
田口 真嗣株式会社今治、夢スポーツ 代表取締役社長
矢野将文

●株式会社小友木材店 営業部長

花巻おもちゃ美術館 初代館長 平野 裕幸 氏

「木の空間は、人を優しくさせるんだ！ 木育で世界に挑戦！ 小友木材店の取組。」

花巻おもちゃ美術館は、木育を核とした地域連携のモデルケースを構築し、木の魅力を遊びや学びを通じて広める活動を展開しています。「出張おもちゃ美術館キット」で市町村のイベントや商業施設などへ仮設の木育空間を設置、子どもたちが学びと遊びを体験できる場を提供しています。地元企業や宿泊施設と連携し、木質化されたキッズスペースの設置・改修も進めており、さらに、木育の活動を海外にも広げ、アメリカの姉妹都市ホツスプリング市でのイベントを通じておもちゃが「世界共通言語」であることを実感しました。このように、木育を通じた学びと遊びの融合、地域連携による経済効果、さらには国際的な展開など、地域社会における木育の推進に精力的に取り組んでいます。

●佐川おもちゃ美術館 館長 岡崎 明子 氏

「佐川おもちゃ美術館 親子、そして多世代に伝える木育」

館長である岡崎氏は、保育士時代の経験を基に、木材利用と子どもの成長を結びつける取り組みを実践してきました。施設内では、親子で木工を楽しむDIY工房や自然体験型のネイチャーゲームを提供。林業従事者と連携したチェーンソーアートやワークショップ、高齢者施設での出張おもちゃ美術館活動など、多様な取り組みを通じて、子どもから高齢者まで幅広い世代に心を揺さぶる場を提供しています。また、子どもたちが自らの成長を実



東京おもちゃ美術館 副館長 星野 太郎

感できる場としていきたいと、地域社会と深く結びついた活動を展開。これからも人と人とのつながりを重視し、心を揺さぶる活動を展開していくことを目指します。

●株式会社ON-WIPPS 代表取締役

特定非営利活動法人自然体験活動推進協議会 常任理事
田口 真嗣 氏

「外あそびと内あそび」

田口氏は、阪神淡路大震災を機に長野県白馬村に移住し、アドベンチャーツーリズムの経験を活かした自然体験型の教育活動を行っています。森や川を舞台に、子どもたちが遊びを通じて学ぶプログラムを展開し、冒険的な外遊びや創造的な活動を推進。高齢者向けのアクティビティでは、認知症の人々を森に連れ出し、自然の中で身体能力や感覚を再発見する試みを実施しています。おもちゃ美術館との連携で外遊び学芸員や森あそび師匠の養成などにも取り組んでいます。自然を通じた人間の成長やつながりを重視し、子どもから高齢者まで幅広い世代に価値を提供する取組を実施しています。

●FC今治／株式会社今治、夢スポーツ 代表取締役社長
矢野 将文 氏

「新しい共助のコミュニティ作りに挑戦」

株式会社今治、夢スポーツは、サッカーを基盤に「次世代のため物の豊かさより心の豊かさを大切にする社会作りに貢献する」を理念に掲げ、多様な事業を展開しています。しまなみアイランドでの自然体験プログラムや、子どもたちが成長するための負荷を取り入れた冒険型プログラムも実施しており、20泊21日で160キロのトレッキングやシーカヤックなど、身体的・精神的な成長を促す活動を通じて、子どもたちの「遺伝子にスイッチを入れる」ことを目指しています。2026年には新たに「しまなみ木のおもちゃ美術館」を開設予定で、木育活動や芸術活動を通じて地域コミュニティの絆を強化していく計画。多くのボランティアや企業と協力し、顔の見える関係を基盤とした事業展開を目指しています。

記録：地域活性化センター 末廣 翼（鹿児島県）

▶ 分科会 03

木育体験・ショートセミナー

木材・暮らしにかかわる商品を提供する、さまざまな企業・団体等が、ワークショップやショートセミナーを実施し、参加者と双方向的に交流をしながら、木育をどのように伝えているかが語られました。

酒井産業株式会社

ロボボ一から分かる
木と森の事！社会福祉法人宗友福祉会
うさぎ堂おもちゃ制作と
林福連携で進める木育

OKAWA FACTORIA

福岡県産材を活用した
子どもの遊び環境づくり

株式会社未来工房

地域主義工務店が
地域とつながり展開する
木育活動

生活アートクラブ

わたしたちにできる
脱炭素

福岡県木材青壮年連合会

セーザイゲームで学ぶ
木育

クロージング

福岡あさくら木育共同宣言

木育共同宣言は、様々な業種・業界が木育によってつながり合い、木育を通じて持続可能な社会の構築に貢献しようという意志を宣言するものです。第6回の徳島大会よりはじまり、前回までに1690の企業・団体・個人からご賛同をいただきました。今回は新たに296の企業・団体・個人からご賛同をいただいています。

◆福岡あさくら木育共同宣言◆

「木とふれあい、木に学び、木でつながる」木育活動を通じて、

1. 森林と地球環境の保全につとめ、持続可能な社会の実現を目指します
2. 素晴らしい水産伝統技術や木の文化を継承し、これらに親しみ大切にすることを育てます
3. 我々の暮らしの中に木を取り入れ、社会的な課題の解決を目指します
4. 豊かな森林資源の有効利用を促進し、日本社会の活性化を目指します
5. 子どもたちの豊かな心、感性と人間性を育む環境づくりを目指します



エクスカーショ

木育サミットの翌12月1日(日)には、実際に朝倉市の森林エリアを見学するエクスカーショを実施しました。

100年ヒノキの森 散策ツアー

株式会社アサモクの多田啓社長による『100年ヒノキの森』での散策ツアー。多田社長の曾祖父の代から続く森であり、福岡おもちゃ美術館オープンの約1年前、館内に敷くフローリングのためのヒノキがこの場所から伐り出されました。木材は出荷までに含水率を下げる必要があり、この時は昔ながらの乾燥法「葉枯らし工法※」を初めて試み、日々試行錯誤されたそうです。100年ヒノキの森には、福岡おもちゃ美術館用に切り倒された木の切り株が残ります。



※葉枯らし工法：木材に含水率が多いと、乾燥した際に割れやヒビ、反り等が出てしまう。近年は早期乾燥のため枝葉を切ってしまうが、伝統的なこの工法では伐採後、枝葉がついたまま山中で寝かせて自然に乾燥させる。

植樹体験

植樹のレクチャーを受けた参加者たちが2人1組で鋤を携え、ヒノキの苗木を1人2本植えました。

